

安位寺殿御自記

宝篋元年分

二十四

内閣文庫	
番號	和 20909
冊數	82 (22)
函號	古 19 359

古文書
一九函共三
三五九號



22
/

22 / 2

宝徳二年

三二九ノ二
共八十三

要録

領身人

宣德二年

二月廿五日

宣德二年二月廿五日

宣德二年二月廿五日

宣德二年二月廿五日

宣德二年二月廿五日

宣德二年二月廿五日

六月小

朔日

一 雲方福寺

一 勿池同前 全野行回遊し 不動の石を爰

一 普賢近本久少及男

一 末檜相と柱とを奉り行し 寺に遊し 寺に遊し

一 寺に遊し

一 在り一将を打つし 寺に遊し

一 寺に遊し

一 寺に遊し 寺に遊し

二日

一 雲方福寺 寺に遊し

一 勿池同前 寺に遊し

一 普賢近本久少及男 寺に遊し

三日

一 雲方福寺 寺に遊し

西和旦云一候し
おしきき神人一人さるも
心同のまど一江列百方之
六島さん又高の
二國し書

奇

まあるの西和旦云一候し
神人一人さるも
心同のまど一江列百方之
六島さん又高の
二國し書

物もさる格すりあし
及神知を
心持を
二候し書

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

しつゝお流りぬるあき方
しり中流に流るる
ゆ七日 流るる
かきり 流るる

かきり 流るる
かきり 流るる
かきり 流るる

かきり 流るる
かきり 流るる
かきり 流るる

かきり 流るる
かきり 流るる
かきり 流るる

一 所 所 所 所
口流下 乃 乃

一 所 所 所 所
乃 乃 乃 乃

かきり 流るる
かきり 流るる
かきり 流るる

かきり 流るる
かきり 流るる
かきり 流るる

かきり 流るる
かきり 流るる
かきり 流るる

しつふふふふふふ

昔御事... 地蔵院... 行...

吉日... 由...

極...

... 但...

... 人...

... 極...

... 極...

... 地...

... 地...

... 地...

...

...

...

...

...

...

...

...

吉日...

...

一 自下力人計湖之人者去之 高防打石之請
 常而後事寸心法之と連障とあり方古隠居
 小野又利高の井あり人後相定する方と海
 寺に中巴とあり海と連中中由方より来
 諺る活ん北也て振舞上三清比云沙方先
 丁のゆりてふ未真んか
 一 九条法苑の支那とて以中三作考より
 志却る存あり以不修考一修考
 七のふりあり
 一 惣考向野中
 一 何の事田方より高出石形と

先有玉懸

玉の面氣と連流とありの信晴より

古より多入是少神々の能と実自玉の是
 之能く 善長石一寺の法方去却云病
 満入の法とて中良田とて三三少の宿僧
 一 宇治の楊柳寺の 以楊州中一の言とて
 由る井上高の以の 田中法僧の面とて
 楊のりの中 存あり 出るあり 郊外
 あり 死より 伊の 法僧の 法院 由る あり
 寺より 文を して 法方と あり 中 伊 原
 中 寺より 初め あり 用 あり 寺と して 破 中 及
 又 あり あり 楊の 坊の 良僧 あり あり 法 僧
 中 あり あり あり あり あり あり あり あり

一 宇治の楊柳寺の 以楊州中一の言とて
 由る井上高の以の 田中法僧の面とて
 楊のりの中 存あり 出るあり 郊外
 あり 死より 伊の 法僧の 法院 由る あり
 寺より 文を して 法方と あり 中 伊 原
 中 寺より 初め あり 用 あり 寺と して 破 中 及
 又 あり あり 楊の 坊の 良僧 あり あり 法 僧
 中 あり あり あり あり あり あり あり あり

皇百新
備州本坊主越方最事之所の言何有
梅見主人何の下を口り又下少神
かたき

忠日面よむ事成し
多ありしは安き人の名且進するは御
候方あるは下を口り又下少神
一喜店に候之相問ふとこしは也わしは務
かたき
傷事切候れり且無行のしは所も
とつ海に
この所や三人候下人魚を

其日并丸
高田の奉行御
入封由念は下

一か入海向りて先より中極出記古に事
如程物入備州「福」有るは上所
日地成候事
内心中候道方候
三寸候事
大日御神
向高
かたき

廿六日由

おのりす 祿危とうし 備三所 汝也 何ん 以 後

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 社有 回用 何れ 何れ 元 牙 以 一 町 有 也

一 和語も... 由緒... 自... 良... 趣... 方... 事... 記...
 一 和語も... 由緒... 自... 良... 趣... 方... 事... 記...
 一 和語も... 由緒... 自... 良... 趣... 方... 事... 記...

三日

一 和語も... 由緒... 自... 良... 趣... 方... 事... 記...
 一 和語も... 由緒... 自... 良... 趣... 方... 事... 記...

一 和語も... 由緒... 自... 良... 趣... 方... 事... 記...
 一 和語も... 由緒... 自... 良... 趣... 方... 事... 記...

四月 舟又之

一 和語も... 由緒... 自... 良... 趣... 方... 事... 記...
 一 和語も... 由緒... 自... 良... 趣... 方... 事... 記...

おひらけの中へ一破けの立よぬ
 物なる物も成程しり下らんぬしき
 一 なるは 活字なるより 思ひ下り
 一 中 活字の 活字行しき 活字の
 一 活字の 活字の 活字の 活字の

中 活字の 活字の 活字の 活字の
 一 活字の 活字の 活字の 活字の

地 活字の 活字の 活字の 活字の
 一 活字の 活字の 活字の 活字の

活字の 活字の 活字の 活字の
 一 活字の 活字の 活字の 活字の

活字の 活字の 活字の 活字の
 一 活字の 活字の 活字の 活字の

活字の 活字の 活字の 活字の
 一 活字の 活字の 活字の 活字の

活字の 活字の 活字の 活字の
 一 活字の 活字の 活字の 活字の

新設 新設 新設

田方 板 主 二 年

杉原 杉原

中 杉原

新設 新設

新設 新設

大 号 子 之 下 小 号 子 之 下

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

一 号 子 之 下 新 設 杉 原 杉 原

三月

杉原 杉原

四月

公任上石内并

移之候 院之者 志一 山名

清和付所 院之者 志一 山名

坊成 院之者 志一 山名

浮麻 院之者 志一 山名

坊河 布上

精 院之者 志一 山名

坊河 院之者 志一 山名

財 院之者 志一 山名

十日

初之候 院之者 志一 山名

坊之者 院之者 志一 山名

坊之者 院之者 志一 山名

坊之者 院之者 志一 山名

廿日
夕海向ニテ合討付如所
其法五段に及ぶ(五段の所)

廿日
夕海向又夕海向(夕海向)

廿日
夕海向

廿日
夕海向(夕海向)

廿日
夕海向(夕海向)

一
夕海向(夕海向)

廿日
夕海向(夕海向)

廿日
夕海向(夕海向)

廿日晴
 向方之北
 運盛
 盧清

中判
 通判
 右

次
 右

次
 右

次
 右

次
 右

次
 右

次
 右

次
 右

末下海三郎 入湖

松口上野介 九郎

小字山清 五郎

上政 肥田 守方 五郎

上政 肥田 守方 五郎

伝 本 守 正 田 守 方 五郎

伝 本 守 正 田 守 方 五郎

伝 本 守 正 田 守 方 五郎

高野 守 正 田 守 方 五郎
伝 本 守 正 田 守 方 五郎

尾代 四郎 貞徳

田守 守 正 田 守 方 五郎

小字 守 正 田 守 方 五郎

田守 守 正 田 守 方 五郎

田守 守 正 田 守 方 五郎

田守 守 正 田 守 方 五郎

田守 守 正 田 守 方 五郎

田守 守 正 田 守 方 五郎

高野 守 正 田 守 方 五郎
田守 守 正 田 守 方 五郎

内上 守 正 田 守 方 五郎

傳
守 正 田 守 方 五郎

一 守 正 田 守 方 五郎

之知照

此知照 皇族日徳人し 子下下流は天師年十四
上白 子下下流は天師年十四
恒例金銀券金

上白

此知照 皇族日徳人し 子下下流は天師年十四
上白 子下下流は天師年十四

上白 子下下流は天師年十四

上白 子下下流は天師年十四

上白 子下下流は天師年十四

上白 子下下流は天師年十四

上白

上白 子下下流は天師年十四

上白 子下下流は天師年十四

上白 子下下流は天師年十四

上白 子下下流は天師年十四

三月小

朔日

○江戸方揚子書

○五ノ子前

○大市一紙之序し多傳程久し

○有七月廿五日地望如左方日記

土月大

朔日

○江戸方揚子書

○白海因以下前

○今初スルもの

○吉市上紙之序し多傳程久し

○傳子前

○普傳果本久し

二日

○江戸方揚子書

○吉市上紙之序し多傳程久し

四日

刻立速偏上上流流流のきわつたきり
市市福州人力若れれ上流流の因力りり
いよこ切日向本津流りりりりりりりり
中川色あきりりりりりりりりりりりり

五日

辰刻竹葉津以無流二二うりりりりりり
重て上流の流上流りりりりりりりりりり
秋河有の母市市市市市市市市市市市市
市市市市市市市市市市市市市市市市市
ととととととととととととととととととと
上りりりりりりりりりりりりりりりりり
宿社即と地りりりりりりりりりりりり

お船中し位と余よとととととととととととと

流りりりりりりりりりりりりりりりりり
水のりりりりりりりりりりりりりりりり
ととととととととととととととととととと

一日

多し極りりりりりりりりりりりりりり

二日

市市福州上流中左出津入を田市市市市
中市市市市市市市市市市市市市市市市
市市市市市市市市市市市市市市市市市
力と流上力りりりりりりりりりりりり
日と心天田津州上流りりりりりりりり

入言一と去カ月を二言と
お向とちあひ
お初中とあひ記く
お向のりお月を
賦る
お向此と賦る
お向此と賦る

向方余と極ち
お向此と賦る

善師との友節く
お向此と賦る
お向此と賦る
お向此と賦る

お向此と賦る
お向此と賦る
お向此と賦る
お向此と賦る

お向此と賦る
お向此と賦る
お向此と賦る

お向此と賦る
お向此と賦る
お向此と賦る

也及漢孝子人皆難濁并下之禮儀存貴賤
 階級去人倫之法也此官制有法也知寺社
 也別之法則我朝事法會人奉朝堂庶民之
 政通加極民之知事寺門傳例之表也
 依之儀表所去以上中病之辭之卷中制
 抑之有法方願是格致之相也此之儀也
 然則龍田美原山田重美首田國加等者
 其樂也格也也此之儀也此之相也此之

本寺自開創以來其法海愈而愈

事畢 自開創以來請滿寺

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

長下橋信

長下橋信

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

法隆寺講堂

寶德二年七月 日列人五師臣

0123456789
 1011121314
 1516171819
 2021222324
 2526272829
 3031323334
 3536373839
 4041424344
 4546474849
 5051525354
 5556575859
 6061626364
 6566676869
 7071727374
 7576777879
 8081828384
 8586878889
 9091929394
 9596979899

0123456789
 1011121314
 1516171819
 2021222324
 2526272829
 3031323334
 3536373839
 4041424344
 4546474849
 5051525354
 5556575859
 6061626364
 6566676869
 7071727374
 7576777879
 8081828384
 8586878889
 9091929394
 9596979899

6

7

8

x

22

1

47

止

紙
数
四
十
五
枚

1

2

x

